〔一〕 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。解答番号は〔一〕の 1 から 13 までとする。

岡潔（おかきよし）はその非常に分かりやすい著作である『日本のこころ』（講談社文庫）の中で修羅（ア）とは何かを、あの六道輪廻（りくどうりんね）の内面的現象としてうまく説明している。周知のように六道とは天・人・修羅・畜生・ガキ（a）・地獄のことであって、仏教によれば一切（いっさい）衆生（しゅじょう）が善悪の定めによって死後必ず行く世界ということになっているが、岡潔はもちろんそのような意味で六道を説明しているのではない。彼によれば六道とは人間がまさしくこの人生において、この世で体験する心の有り方（イ）の内在的様態なのであり、その的確な説明は少し読んだだけで、直ちに彼がどれほどの精神的苦労を重ねてきた人かが誰にも容易に察せられるほどである。

さて、そこで岡潔は、修羅とは限りなく同じことを繰り返し、ついに心に悦びが感じられなくなってしまう状態であると説明している。

例えば多くの生徒は様々な期待を胸に秘めて入学する。しかしやがて授業は毎回同じ教師の単調な講義と説教を聞くだけのものとなってしまい、そこに何の新鮮さも感じられなくなったとき、彼らの心は修羅に直面する。

例えば新入女子社員も様々な期待を胸に秘めて入社する。しかし毎日が与えられたデータを単調にコンピューターにインプットするだけで、一日中ブラウン管を眺めているばかり。あとは若い営業の男性がすべて出払った後の、フウサイ（b）あがらない中年課長の後姿を眺めていなければならないとき、彼女たちの心は修羅に直面する。

修羅はいたるところに存在する。我々が毎日の生活の繰り返しの中で、心に新鮮なものと向きあうときの悦びを見失ったとき、直ちに我々の心は修羅に直面する。

そしてその修羅の中でも、自らそれを繰り返すことが修羅であると良く分かっており、そこに悦びなぞ一切無いことが分かり切っているのに、それをやり続けねばならないような運命へと追い込まれたとき、我々はまさしくそれを修羅場と呼んでも良いだろう。

現在の哲学や、思想の息づく場所もまた①そのような修羅場のひとつである。わたしはその修羅場について語らねばならない。

ここではまず最初に、文化と論理的思考法について述べてみよう。

わたしの考えでは人間の既成の文化はそれ自体、新しく生まれてきた人間に対して②反世界からの逃走の方法を生きることの意味として教える教育装置の役割を果たしている。例えば二本足で立っていることも人間の出現以来の文化であり、誰もこの文化の力に逆らって生きることはできない。

学校、家庭、マスコミ等の教育上の役割は言うに及ばず、ファッション、身のこなし、歩き方、笑顔のつくり方、声の出し方まで、一切が反世界からの逃走の方法を生きることの意味として人間に教えている。③文化の一切は人間を教育する。

しかし、それらの中でもとりわけ巨大で、圧倒的な教育装置として働くものは言葉による論理的思考法であろう。

そこでこの論理的思考と、それを支える理性の働きを反世界の次元の前で考察することから本論を始めなければならない。

さて、そもそも、わたしたちは皆、成長するに従っていつしか論理的な思考を身につけ、自分自身の考えを他者に知らせることに成功しているように見える。

しかし実のところは誰もが、この世界の論理のつくり方に自らを従わせることによってなんとかしてうまくこの世に存続しようとしている自分を、ほんの少しくらいはうすうす感じているのではなかろうか。

わたしは本職が高校教師であるが、教師であろうと、何であろうと、他者を説得するということは、最初は心情的であっても、最終的には必ず何らかの論理にたよって相手を説得するということだから、わたしは生徒たちを前にして得意になってしゃべっているとき、自分はある種の嘘をつくことによって、なんとかしてこの世界に存続しつづけようとしているだけではないかと、ときとして感じることがある。

ずっと幼い頃からわたしにはこの感覚があったような気がするが、それがはっきりとした問題意識となったのはもちろんずっと後のことだった。

論理はすべて嘘なのかもしれない。あるいはその論理的思考を支える理性そのものに何か

があるのかもしれない。

やがてわたしは、④このわたし自身の理性に対する個人的異和感が、実は近代の問題と同根であることを自覚するに至った。カントの『純粋理性批判』やフッサールの『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』は、近代ヨーロッパの理性の限界を究めんと、この問の中の問に最高度に迫ったものだが、我々が読むとやはりそれは理性という枠組の中での理性に対する考察でしかなく、この生の全体が明らかにされているという喜びがそこにはない。問のたて方自体が誤っていて、わたしが反世界と呼びならわしているものの次元がそこには描かれていないという不満感をわたしは禁じ得ないのである。

わたしの考えではもちろんすべての論理は嘘である。⑤嘘というのが適切でなければ仮説と言ってもよい。そしてその論理的思考を支える理性は意志によって支えられているのだから、人間に固有の意志とでも呼べるものがあれば、それこそがもっとも本質的なものだとわたしは考えたいのである。

人間に固有の意志とは、何かを決意し、それを持続する能力のことだと考えたい。どこまでも二本足で歩いてみせると自らの心につぶやいた原始人の意志こそが原初の意志だったとも言える。我々はその肉体の形まで根源的な意志によってできているとわたしは思う。そして⑥この意志を持続させる為に言葉は発生したのだ。先にも述べたが言葉が動物的な叫びの水準を離脱できたのは、我々の先祖が自らの意志を持続させる必要を感じていたからなのだ。

だが、やがて言葉は自身が本来意志の道具であったことを忘れ、西洋においてはその極端な形としてプラトンのイデア論にケッショウ(c)した。東洋においては言葉の出発点の彼方に残してきた反世界への記憶が忘れ去られることはなかったので、仏教や、老荘の思想的伝統の中で、イデア論ほどの⑦倒錯が行なわれることはなかった。しかし、近代に入って西洋から突きつけられた形而上学的な問にほとんどまともに答えられなかったところを見ると、この東洋の伝統も、ケイガイ(d)化した書物の中での言葉としてのみ残されていただけで、その本来の精神はほぼ消え去ってしまっていたらしい。あるいはその本来の精神が既に徹底性を欠いた中途半端なものにヘンシツ(e)してしまっていたと言うべきなのかもしれない。

（南木隆治『ゴータマ・シッダールタの冒険』による。ただし、本文の表記を一部改変した）

問一　二重傍線部ⓐ～ⓔの漢字と同じ漢字を含むものを、次の各項の中からそれぞれ選び、その番号をマークせよ。

1
ⓐ　1　記念日のケイガ　2　ガマンする
3　ガゴウをもつ歌人　4　キガ状態

2
ⓑ　1　サイノウを発揮する　2　監督のサイハイ
3　冠婚ソウサイ　4　サイバンの判決

3
ⓒ　1　スイショウ球での占い　2　ショウガク金の貸与
3　リョウショウする　4　ショウトウ時刻

4
ⓓ　1　ヒガイ額の算定　2　ズガイ骨
3　ガイトウ欄に記入する　4　ガイコツの標本

5
ⓔ　1　シツカンと手触り　2　シツド計
3　オンシツ育ち　4　シツムにあたる

問二　傍線部①の説明として、最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

6
1　日々の単調な営みをずっと繰り返し、それを積み重ねていくにすぎないような修羅場
2　同じことを繰り返し続けていくうちに、人間的な感覚を徐々に喪失していくような修羅場
3　悦びなど一切得られなくても、同じことをやり続ける運命を引き受けるしかない修羅場
4　期待をいだいてそこに入っても必ず裏切られ、いつしか自分を見失うことになる修羅場

問三　波線部ア～エのうち、傍線部②にあたるのはどれか。最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

7

1　ア　修羅　　2　イ　心の有り方の内在的様態

3　ウ　理性という枠組　　4　エ　言葉の出発点の彼方

問四　傍線部③の説明として、最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

8

1　文化の一切が、人間を反世界から脱却させ成長させるための装置である

2　文化の一切が、人間が対峙する反世界と闘争するための装置である

3　文化の一切が、人間による反世界の忘却を促進するための装置である

4　文化の一切が、人間の目を反世界から逸らせるための装置である

問五　空欄 9 に入る言葉として適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

9

1　本質的欠陥　　2　革新的飛躍　　3　潜在的敵意　　4　多面的特性

問六　傍線部④でいう「個人的異和感」はどういう点において「近代の問題」と同根であるといえるのか。その説明として、最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

10

1　論理的思考の支えとなる理性を超える超越的な存在を追求したいという願望において

2　理性に限界を感じつつも理性を用いて思考せざるを得ない矛盾と葛藤において

3　繰り返しによって悦びが失われる修羅場を克服して真の悦びを希求するという方向性において

4　本来理性によって捉えられない理性そのものをなんとか捉えようとする自己矛盾的な営為において

問七　傍線部⑤のようにいう理由として、最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

11

1　論理は、いくら証明を求めても永遠に実証できない仮説のようなものだから
2　論理は永続せず、時間とともに説得力を失っていく仮説のようなものだから
3　論理は、かりそめの説明図式を提供するにすぎない仮説のようなものだから
4　論理は実体がなく、真実性も現実性の基盤も欠いた仮説のようなものだから

問八　傍線部⑥の説明として、最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

12

1　近代になって生じた形而上学的な問いに人間が言葉を通して答えようとした
2　反世界の記憶を言葉につなぎとめることで人間は根源的な意志を実現しようとした
3　人間が自分の足で立とうという決意を形にする道具として言葉が生まれた
4　人間が言葉を獲得した背景には意志がない動物を超えようとする決意があった

問九　傍線部⑦の説明として、最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

13

1　出発点であったはずの反世界の意志が到達点ないし目標におかれてしまっていること
2　本来意志の道具であった言葉が、あたかも主のように支配的になっていること
3　記憶にとどめおかれるべき反世界のことを忘却していること
4　本来言葉でいいあらわせないものをいいあらわそうとしていること

〔二〕　次の文章を読んで、後の問いに答えよ。解答番号は〔二〕の　1　から　8　までとする。

ⓐ人をたのみて下る程に、たのむ人、俄に上りなんとすれば、①身を無縁の境にすてて、志を有願の道に〈便宜あらば善光寺へ参るべき思ひ侍りき〉②とげばやと存すれども、花京に老いたる母あり、ⓑ嬰児に帰りて愚子をしたひ待つ。※夷郷にうかれたる愚子は、万里をへだてて母を思ひおく。ⓒ※斗藪の為に暇を乞ひて出でしかども、ⓓ③棄つとや恨むらむ。無為に入るは真実の報恩なれども、④有為の習はうときに恨あり。もとより思はず、東鄙の経廻を。今はいよいよ急ぐ、　5　。かの最後の命に遇ふ事は先世の縁なれば、坐たりとも違ひなむ、違ふとも来りなん。ただ、契の浅深によせて、志の有無にまかせたり。悲しぶらくは、親も老いたり、子も老いたり。何れか先立ちて、何れかおくれん。ただ、歎く処は、⑤母山の病木、※八旬の涯に傾きて、一房の白花、未だ開けざるに、子石の枯れたる苔、※半百の波におぼれて、※一滴の水菽、未だ汲まざる事を。⑥朝に省み夕に定むる志、とげずして止みなば、仏に祈り神に祈る功、それ如何せん。

（『海道記』による）

※夷郷……辺境の土地。ここでは東国のこと

※斗藪……仏道修行

※八旬……八十歳

※半百……五十歳

※一滴の水菽……水や豆の粥をすする貧しい生活。ここでは親に孝養をつくすという意味

問一　波線部ⓐ～ⓓのうち傍線部①と動作主が異なるものとして、最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ

1

1　ⓐ　人をたのみて下る　　2　ⓑ　嬰児に帰り　　3　ⓒ　母を思ひおく　　4　ⓓ　暇を乞ひて出で

問二　傍線部②の意味として、最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

2

1　かなえたいと思っていたが　　2　罪があったけれども

3　早々に生じたのだろうか　　4　棘の道へ通じさせたのだが

問三　傍線部③と文法的用法が同じものとして、最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

3

1　憶良らは今はまからむ子泣くらむそれその母も我を待つらむそ

2　その馬よしなからむ人に請ひとられなむとす

3　後は誰にと志す物あらば生けらむうちにぞゆずるべき

4　ゆく水と過ぐる齢と散る花といづれ待ててふことを聞くらむ

問四　傍線部④の説明として、最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

4

1　自らの信仰心の薄さには時として不安を覚えずにはいられない

2　人為的に習得しようというわたしの気持ちには偽りがない

3　もしも人に習ったかのように見えるとすれば悔いが残る

4　この世の人のならわしとしては親と疎遠であることに恨みを持つ

問五　空欄 5 に入るものとして、最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

5

1　有願の往生　　2　閑暇の道草　　3　西路の帰願　　4　仏神の孝養

問六　傍線部⑤の説明として、最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

6

1　花やいだ都に住む母を羨む言葉　　2　病身である母親を木にたとえる言葉

3　自分と母の故郷のさびれた状況を表わす言葉　　4　あの世へ召された母の境涯を嘆く言葉

問七　傍線部⑥の説明として、最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

7

1　朝には親の安否を気にかけ、夕べには寝床を調えるような親への孝行をしようとする志

2　朝には入信した事実を自白し、夕べには早くも改心して出家しようという志

3　朝には帰京したことを後悔し、夕べには鎌倉に戻ろうと決心するすばやい転換の志

4　朝には親にかけた心配を反省もせず、夕べには親に頼って同居しようと心に決める志

問八　本文と同じく鎌倉時代に成立したものとして、最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

8

1　古事記　　2　十六夜日記　　3　太平記　　4　折たく柴の記

〔三〕 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。解答番号は〔三〕の 1 から 8 までとする。

ハンガリー出身の写真家、アンドレ・ケルテスの作品集『読む時間』（一九七一年）には、ケルテスが一九一五年から一九七〇年にかけて、世界のさまざまな場所で何かを読んでいる人たちを撮影した作品が並んでいる。ニューヨークでも、パリでも、東京でも、マニラでも、人びとはどこかで何かを読んでいる。路上で、学校の教室で、電車のなかで、公園の木陰で、街角のベンチで、本屋で、教会で、書斎で、部屋に飾られた絵画のなかで。読んでいるときの姿勢もさまざまだ。椅子に腰かけている人、地べたに坐っている人、立ったままの人、うつぶせに、あるいは寝そべって読んでいる人。読んでいるのは本だったり、新聞だったり。路上にゴミとして落ちている、新聞か何かの切れ端を読んでいる子どもの写真もある。

一九六八年に京都で撮影されたという、一枚の写真が目に留まる。和装の人物二人が電車のなかで、並んで坐っている。外見と服装から判断すると、二人は中高年の女性で、どちらも眼鏡をかけていて、熱心に何かを読んでいる。手前の人物は本を、奥の人物が手にしているのは雑誌だろうか。

ケルテスは小型カメラを持ち歩いて、人びとの日常の一瞬をとらえ続けた写真家だという。この写真も当時の日本の都市にはありふれた、日常の一コマを切り取った写真なのだろう。①しかし、現代のわたしたちにとっては、そこにある風景はもはや日常ではない。和服姿が見慣れないだけではない。二〇二〇年代の都会の電車のなかで、紙の本や新聞、雑誌を手にしている人をどれだけ見かけるだろうか。写真には二人のほかに乗客の姿はなく、古いモノクロのフィルム写真がまとう不思議な空気感と、窓から射しこむ日の光が床につくっている陰影模様とが、ある種の距離感、遠さの感覚を演出している。写真にはアウラ※はないとヴァルター・ベンヤミンは言ったかもしれないが、デジタル写真時代のわたしたちの眼には、フィルム写真は独特のアウラをまとっているように見えてしまう。ケルテスの写真のなかにある日常風景は、かつてそこにあったが、いまではもう失われてしまった日常だ。だが、わたしたちがその日常のこまごまとした 2 に注目し、記述することができるのは、その風景がわたしたち自身にとっては非日常だからにちがいない。

日常について書いたり語ったりするのは、意外と難しい。②大学で「日常と文学」というテーマの講義をしたとき、学生に「あなたにとって日常とは何ですか」と質問すると、たいていの学生は困惑していた。「朝起きて、ご飯食べて、大学に来ること」などと、自信なさそうに言う。物語とはたいていの場合、非日常的なできごとを語るものだからだ。しかし、ある一人の学生は、うがったことを言った。「大学がオンライン授業になったとき、生活が大きく変わったけど、しばらくするとそれが日常になった。どんなに特別なできごとでも、ずっと同じことをしているとそれが日常になる」。この講義は、二〇二一年度の秋に開講されていた。新型コロナウイルス感染症対策のために大学にオンライン授業が導入されてから一年半ほど経っており、いわゆる「新しい日常」はすっかりキャンパスに定着していた。（略）

ケルテスの写真集が教えてくれるとおり、日常を能動的に知覚するためには、そこから離れた非日常の視点から、日常を見なければならない。しかし、いったん離れてしまったら、それはもはや日常ではなくなる。逆にいうと、どんなに非日常的な経験であっても、慣れてしまったらそれはいつしか日常に変わる。いや、日常に住まうことをやめずに、日常を知覚する方法がないわけではない。その一つの方法が、本を読むことである。書物のなかにある非日常を、あなたが住まうその日常と同時に、経験するのだ。そうすれば、日常を物理的に離れることなくとも、非日常の視点を獲得することができるだろう。

一九五七年に刊行されたイアン・ワットの『小説の勃興』は、英文学史における近代小説の誕生について、その後長く流布することになる言説を創始した有名な本だ。この書のなかでワットは、ダニエル・デフォーの『ロビンソン・クルーソー』（一七一九年）が「最初の小説」だと考えられる理由を、「ふつうの人の日常の活動が持続的な文学的関心の中心となっている最初の虚構の物語」だからだと説明している。それまでに書かれていた物語では、登場人物は特定の型（タイプ）にはまっていて、神学的な※プロットに合わせて動く操り人形のような存在だった。それがデフォーの小説では、人物は「ふつうの人（ordinary person）」となり、決まったプロットに従って動くのではなく、読者たちと同じような日常生活を営む個人になったのだという。

『ロビンソン・クルーソー』を冒険譚だと思っている人には、ワットの主張は意外かもしれない。絶海の孤島に漂着するな

んて、わたしたちの日常からはかけ離れた非日常だからだ。けれども『ロビンソン・クルーソー』を実際に読んでみればわかることだが、この小説のいちばんの読みどころは、クルーソーが孤島でどうやって生活したか、どうやって家をつくり、衣服をつくり、野菜を育て、パンを焼き、家畜やペットを飼ったかなど、細部にいたるまで具体的に書きこまれているところなのだ。もっとも、厳密にいえば、クルーソーの孤島での生活は一八世紀初頭にこの小説を読んだ人びと、都市の中流階級や識字能力のある使用人階級の人たちの生活とはずいぶん異なっていたはずだ。ロンドンで生活している人は、パンを食べるのに小麦を栽培するところから始めたりはしなかっただろう。当時の読者がこの小説をおもしろがって読んだのは、そこに描かれている日常生活が、すでに失われたものだったからではないか――ケルテスの写真集を見て、わたしたちがそう感じるように。

英国における小説の全盛期といえば、ヴィクトリア朝（一八三七―一九〇一年）だ。そして、ヴィクトリア朝の大衆、とくに都市生活者の日常を書いた小説家といえば、多くの人が※チャールズ・ディケンズの名前を最初に挙げるのではないだろうか。ディケンズは下層中流階級の出身、父親は海軍支払局の事務員で、もともとは比較的裕福な家庭だった。しかし、一二歳のときに父親が借金のせいで投獄され、家計を助けるためにロンドンの靴墨工場で働いた経験がある。本人にとっては不幸な経験だったようだが、こうした生育期の経験は、ディケンズが都市の大衆の生活を大衆の目線で活写することができた理由の一つなのだろう。（略）

現代の視点でディケンズの小説を読むと、彼がたんにヴィクトリア朝の大衆の日常生活をそのままのかたちで描いたというだけでなく、その日常がまさに変容しつつあったプロセスをも克明に記述しようとしているのがわかる。たとえば『大いなる遺産』（一八六一年）はディケンズの作品としては後期に分類される、やや暗いトーンの長編小説だが、主人公／語り手のピップの成長物語をつうじて、人びとの都市への移動が日常生活に与えた変化がみごとに書きこまれている。もっとも大きな変化だと思われるのは、都市への移動によって、職場と家庭が完全に分離してしまうことだ。村に住んでいるときのピップの家族（姉と義兄）は、職住が近接する環境で暮らしている。義兄の鍛冶場は自宅の隣にあって、そのような環境であることが、プロットの展開にも大きな役割をもっている。しかしロンドンでは、典型的な勤め人は自宅からはまったく離れた場所で仕事

をする。法律事務所の事務員であるウェミックさんは、みずから意識的に職場と家庭を切り離している。「職場と私生活は別なのです。職場に行くときには〈城〉のことはおいていきますし、〈城〉に戻るときは職場はおいてきます」。職場での彼は、郵便箱のスリットみたいに口をぎゅっと結んでしかめ面をしている。一方、南ロンドンのウォールワス地区にある自宅ではとても親切で［　4　］になり、ピップをみごとな手料理でもてなす。③自宅では年老いた父親を介護しているのだが、職場ではそんなことは一言も漏らさない。自宅には菜園のほか、豚や家禽まで飼育しており、さながらロンドンの真ん中につくられたロビンソン・クルーソーの孤島のようだ。ウェミックさんの家庭生活のエピソードは、こうした温かで「家庭的な」日常そのものが、都市生活者の一日のタイムテーブルからは失われつつある非日常だったのではないかと感じさせるような、ある種のノスタルジアを漂わせている。

『ロビンソン・クルーソー』から二〇〇年近いときを経て、二〇世紀を迎えるころには、社会における小説のポジションにはふたたび変化が訪れる。識字率の上昇とともに小説の読者人口は拡大し、一九世紀の終わりごろ、※『闇の奥』が刊行されるころまでには、異なる社会階層や政治思想をもつ読者ごとに小説は分類され、異なる媒体をつうじて発表されるようになった。一九世紀末には映画というメディアが発明され、二〇世紀には小説に代わる「大衆的」メディアとして発展を遂げていった。同じころ、小説の中心的な関心はいまだ個人の日常生活であり続けたとしても、近代小説の規範を乗り越えようとする作家たちも現れた。いわゆる「モダニスト」たちだ。そのカテゴリーに含まれる作家たちの多くは、日常を芸術の内容であるとするよりはむしろ、日常性を小説の語りや文体、リズムといった形式そのものにとりこもうとした。（略）

ヴァージニア・ウルフもまた、④一九世紀リアリズムの慣習から離脱して日常の「生」をまるごと書くための文学形式を模索した作家の一人だ。彼女のエッセイ、「現代の小説（モダン・フィクション）」（一九二五年）にある以下の一節は、モダニズム文学のマニフェストの一つとしてよく知られている。

生は左右対称に並んだ眼鏡のレンズではない。生はぼんやりと輝く光輪、わたしたちの意識を始まりから終わりまで包み

こむ、半透明の外被である。この移ろいゆくもの、この奇妙なかたちの定まらぬ精神を、それがいかなる逸脱や複雑さをみせようとも、異質なものや外的なものをなるべく混ぜずに伝達することが、小説家の仕事ではないだろうか。

このぼんやりと輝く「生」を書くことに、ウルフはライフ・ライティングという名前をつけた。そして、これを小説家の仕事だと考えて、実践する方法を試行錯誤した。ウィリアム・ジェイムズの心理学の知見を応用した「意識の流れ」という描写手法も、その一つだ。わたしたちの日常的な意識は、何か一つのことに持続的に集中しているわけではない。そうするためには静かで鍵のかかる書斎が必要で、そうでなければ意識はつねにあちらこちらへと逸らされ、思考はとりとめもなく移ろっている。一瞬、何かすごいことを考えついたと思っても、次の瞬間にはどこかに流れ去っている。とくに女性は長いあいだ、比較的裕福な家の人でも書斎なんてまずもっていなかったし、独りでゆっくり自由に思考する時間なんてものもなかった。『自分ひとりの部屋』（一九二九年）のなかでウルフは、ジェイン・オースティンが共同の居間のさざめきのなかで小説を書いていたせいで、⑤彼女の小説はそれ自体すばらしいものではあるけど、どこか限界があったと述べている。

（中井亜佐子『日常の読書学　ジョゼフ・コンラッド『闇の奥』を読む』による。ただし本文の一部と見出しを省略した）

※アウラ……オーラとも言い、ここでは大量生産された複製作品に対して、オリジナルの芸術作品が持つ輝きや権威性のこと

※プロット……物語の筋のこと

※チャールズ・ディケンズ……イギリスの作家（一八一二～一八七〇）。リアリズムとされる作品を多く書いた

※『闇の奥』……イギリスの作家ジョゼフ・コンラッド（一八五七～一九二四）の小説

問一　傍線部①の説明として、最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。　1

1　いずれ失われるこまごまとした風景を切り取った写真は、ケルテスが意図したように非日常性を見事に表現している
2　写真にアウラは存在しないとヴァルター・ベンヤミンは述べたが、写真はかけがえのない瞬間的な非日常を写し取る
3　乗客が二人しかおらず、さらに窓から射しこむ日の光がつくる陰影が独特の寂しさを伴い、非日常感を演出している
4　そこに写る風景だけでなく、フィルム写真という媒体すらも、私たちには遠い感覚をもたらす非日常的なものである

問二　空欄　2　に入る言葉として、最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。　2

1　メタファー　　2　ディテール　　3　タイムテーブル　　4　モノローグ

問三　傍線部②の理由として、最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。　3

1　突如訪れた「新しい日常」を正確に説明できる語彙を持っていなかったから
2　人前で披露できるほど多くの非日常的な物語を読んでいるわけではないから
3　語るほどの内容を持たない日々こそがまさしく日常だと考えられているから
4　非日常的な状況もそれがずっと続けば単なる日常になり下がってしまうから

問四　空欄　4　に入る言葉として、最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。　4

1　饒舌　　2　怠惰　　3　傲慢　　4　狡猾

問五　傍線部③の理由として、最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

5

1　菜園や家畜を所有することで生活に余裕があり、父親の介護は大きな問題ではないから
2　温かな家庭生活のエピソードは、ノスタルジアを感じさせるものに留めておきたいから
3　私生活を正直に明かすことで、職場での自分のイメージが崩れるのを気にしているから
4　都市において労働する市民にとって、職場と家庭は別だという意識が根付いていたから

問六　傍線部④の説明として、最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

6

1　都市生活者の様子を異なる階層の立場から記すこと
2　日常性を小説の形式そのものにとりこんでいくこと
3　ぼんやりと輝く「生」の光輪を複雑なまま書くこと
4　小説において「ふつうの人」の日常生活を描くこと

問七　傍線部⑤のようにいうのはなぜか。その理由として、最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

7

1　当時の女性という立場上、一つのことに持続的に集中するための空間や時間を持てなかったから
2　他人と比べてあまり裕福な生活ではなく、作家にふさわしい書斎を作ることができなかったから
3　騒がしい共同の居間で執筆活動をしていたことによって、周囲の雑音が作品に混ざり込んだから
4　ウィリアム・ジェイムズの心理学の知見を用いた「意識の流れ」の描写手法を知らなかったから

8

問八　本文の内容と合致するものとして、最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

1　ハンガリー出身の写真家であるアンドレ・ケルテスは、何十年もかけて、世界中の人々が私的な場所で本を読むさまざまな姿をカメラで撮影し続けた

2　書物のなかに描かれた日常と、自分たちが出会う非日常とを同時に経験し、慣れることによって、両方の視点を能動的に知覚することが可能になる

3　『ロビンソン・クルーソー』を一八世紀初頭に読んだ多くの人々は、孤島の生活風景に失われた日常を見出し、おもしろさを感じた可能性がある

4　一九世紀末に映画が発明されたことで、小説は「大衆的」なメディアとしての地位を奪われかけたが、結局その流れは一時的なものに過ぎなかった

（以　下　余　白）